

## 一橋以来のわが道

大平正芳君よもやま話

対談者 作家・城山 三郎

昭和四九年一〇月二八日、大蔵大臣時代に一橋大学の同窓である城山氏と行った対談。副題どおり「よもやま話」が披露されている。なお本稿は、「如水会々報」に掲載された速記録を、城山氏が訂正したもの。

### これからの日本経済

城山 まず、会員すべてが関心を持っている経済問題についてお伺いしたいのですが、経済の安定した姿というのはいたいどんなものか。そして、その時期には、いつごろ入っていくだろうかというのを、おっしゃっていただきたいと思えます。

大平 安定した姿というのがわかれば、ほくもたいへん楽なだけで、それはわからないんですよ。なぜわからないかというと、日本の経済の規模というのは、いったい、いまの各種内外の制約の中で、どのくらいであっていいかということが、いまよくわからないんです。しかし、いまより非常に大きいものだという想定はなかなかできない。といって、いまより非常に小さいものにするといっても、これは不可能だし、わたくしは、いまあるがままの状態とあまり大きく違わない状態というのが、い

ま一応われわれが想定しておかなきゃいかんのかなと思えます。そうすると、いま総需要抑制策という重しをはずしまして、皆さんどうぞ活発にやっていたできます、といいきれるかどうかという、またそれは非常に危いんです。むしろ、いまの状態というのが、いまのいろいろな内外の条件からいってサイザブルなものだとすると、この状態は相当長く続かなきゃいかん。続けてしかるべきものだという理屈になってくるわけですね。

そこで、その見極めが少しつくまで、ほうぼう繕いをしていこう。起きてくる事態に対してはいちいち放っておくわけにはいかんから、機動的対処をしながら、大きな規模としてはこのようなところをそんなに大きく崩さんようにやっていかなきゃいかんのかなという感じがする。だから、そういう意味では、薄氷を踏む思いですね。大股に歩けないという、用心深く歩いていかなきゃいかんのかなか、という感じですね。

城山 この前、原安三郎さんという、日本化薬の会長さんですね、九十歳ぐらいですけれども、あの人は現役の経営者としては最年長だし、非常に長い間経営者をやっておられるからというので、お会いして、いままでのいろいろな恐慌とが大不況とかに比べていまの段階をどう見られるかと聞いたら、いままで自分は七回ぐらい恐慌　まあ、いろいろな意味の恐慌を経験した覚えがありますけれども、今度のは、自分としてはいちばん軽い感じがすると言われるんですね。たとえば、終戦直後の、これは恐慌じゃないけれども、ああいう会社でいえば、賠償で施設はとられちゃう、製品はぜんぜんつくれるかつかれないかわからない、原料はない　そういうない尽くしに比べれば、いまいるいるなというけれども、まだまだ恵まれてる、というわけですね。だから、ちょっと、不況下況と比べて、戦後そういうことがあまりなかったから、おびえすぎてるんじゃないか、新しい経験がもし

れないけれども、けっして珍しい経験じゃないはずだという話をされたんですがね。

大平 そうですね。

城山 そういう意味じゃ、ある種の楽観論みたいですけどもね。

大平 わたしは、原さんのご意見のように楽天的になれないな。日本経済の存立の条件が非常にきびしく問われておる。これは日本ばかりでなく、グローバルにそうですけどね。そういう中で日本の姿勢と体調を整えていく。どういうふうに整えていけば、まず名譽ある生存が確保されるのか、長続きが確保されるのか、そういうことが問われておるんじゃないでしょうかね。

ですから、かつて条件がこんなにきびしく問われたことはなかった。いままでは、どっちかという  
と原さん流の楽観論で通してきたんですが、バベルの塔はもともと高く積み上げられるという考  
えが支配的だったのだと思いますね。世界を見ても、それは資本主義圏ばかりでなく、社会主義圏も  
そうじゃないですか。世界的にそうですよ。したがって、世界全体がいま問われておるんです。

城山 「名譽ある生存」というのはいいことばですね。ただ生きるだけじゃ、それはいろんな生き  
方があるでしょうからね。

### 余暇の設計は政治課題

城山 初めからたいへん堅い話になったのですが、ちょっとくだけて、これから余暇社会になりま  
すけれども、ラテン語を少し翻訳して、英語で「レジャー・ウィズ・デイグニティー」ということば  
があるんだそうですね。

大平 デイグニティー？ はア。

城山 単に余暇社会だから遊ぶんじゃないやなくて、やっぱり人間の理想はレジャー・ウイズ・デイグニティーじゃなくちゃいかんというわけです。これは日本語には非常に訳しにくいことばになりますけれどもね。レジャー・ウイズ・デイグニティー デイグニティーがあるかないか知りませんが、レジャーは、この前、ゴルフだとおっしゃいましたが、ご自身のレジャーは何ですか。

大平

城山 本が非常にお好きで、しょっちゅう時間さえあれば本屋に行つて、特に新本屋に行かれると  
いうことでしたな。本を読まれることがいちばんのレジャーですか。

大平 ええ。

ただ、レジャーということはいま、政治のいちばん中心課題になってきてる  
と思うんです。わたしのレジャー、あなたのレジャーということじゃなくて、全部ですよ。つまり、  
いま、週休二日制が論じられたり、実践されたり、あるいはもう少しオートメが進んでまいりますと、  
人間のやることを機械がやってしまうようになるわけですね。もうすでに、東レですか、帝人ですか、  
無人工場ができたというじゃありませんか。考えることまで機械がしてくれるということになってき  
ますよね。そうなってきた場合に、レジャーをどう消費するか、消化するかということは、人生の最  
大の問題になるわけです。それで、それは政治にとって最大の課題になってくるんじゃないでしょう  
か。だから、それは、みんながある家庭の拘束の中で、秩序の中で追つていく。いまのところ、夜は  
たいした問題は起こらない。昼はみんな職場に行つて、七時間なり八時間なり職場の規則で拘束され  
てしまうと、たいした問題は起こらない。そのあとで、ピヤホールに行つたり、映画に行つたり、ク  
ラスメートとの会合があつたり、恋人とデートしたりという時間が何時間あるわけですね。その時

間が、いまは、その程度だけど、ずうつと多くなっていくわけですから、そうすると、それをなにかに吸収する装置が必要になるわけですね、政治的装置が。

だから、音楽会であるとか、あるいは競技会であるとか、競馬であるとか、競輪であるとか、映画館あるいは図書館　なにか、それぞれのところへ、レジャーをそれぞれ秩序づけて、そこでみんながレジャーを消費するわけですね。それで、街には人があまり氾濫しない、犯罪の温床をつくらないというようなことが、政治にとって非常にだいじになってくるんじゃないでしょうか。つまり、いままでは、生産をどう組織するか、消費をどう組織するか、技術をどのように開発していくかというように問題だった。いまは、まさに、レジャーをどう組織するかという問題が、最大の問題の一つになってきた。そういう意味で、それはできたら健全なものであつてほしいと思うんですが。みんなが、非常に気品の高い音楽に親しんで情操を高めてもらえるなんていうのは、非常に幸せなことなんです、これが、カントの『純粹理性批判』を読めといつたら、これはちよつと、みんなノーサキニューでしょう。だとすると、みんながなにに没頭して、社会的ないろんなマイナスが起こらず、できるだけプラスになるようなことのためにレジャーが消費されるかということ　それが非常に大きな問題になってきたんじゃないでしょうか。

### 老齡化社会に取り組む

城山　それから、余暇社会になると同時に老人社会になりますね。年齢構成がだんだん老齡化していく。そういう意味じゃ、子供の遊び場もだいじだけれども、もっと老人の遊び場みたいなものをど

んどんつくらないといけませんね。いまは不良少年が問題ですけれども、将来、不良老年というのが非常に問題になってくるんじゃないでしょうか。

大平 老人問題というのは重要問題だと思っんですよ。

城山 そうですね。ですから、いまなにかというと、すぐ子供の遊び場、子供の遊び場というけれども、そういういながら老人の遊び場はどうなっているんでしょう。たとえば河川敷の非常に安い、老人でも安く手軽に遊べるようなゴルフ場などを、いま、ほとんど建設省あたりが取り上げてつぶしますね。そして、それを子供の広場とか若者のスポーツ広場とかにしていますけれども、ああいうのはつぶすんじゃないくて、あれはあれで残しておき、ほかにそういうものを若者のためにつくれればいいんですよ。もっと老人社会のことを真剣に考えるべき段階じゃないかと思っんですけれどもね。

大平 そういうことですね。あなたはまだお若いけど、わたしたちは、もっだいたい老境に入った。(笑) 五十五、六歳がだいたい定年ですわね。わしらはもう第二の定年を迎えてるんですよ。

城山 まだ、これからやってもらわなくちゃならないのに、そんなこといっっちゃ困るじゃないですか。(笑)

大平 これから先、どういう暮らし方をするかというのは大問題ですよ、ええ。

城山 広田弘毅は、やめたあとには鶴沼に引っ込んで、ただ本だけ読んで、散歩してというふうなことで、十年近く過ごすわけですけれども、ああいうのはまあ、稀有。

大平 稀有ですね。

城山 まあ、ゴルフが いくつかのお話じゃ、お強いというか、焼酎みたいなゴルフだということで、なんだろうと思ったら、まずいけど強いゴルフだというお話だね。(笑)

大平 ええ、ゴルフは老人でもできますから 歩くんですからね。

城山 まずいけど強いゴルフというのはどういうことですか。まずけりやたいてい弱いですがね。

大平 まずいというのは、フォームがなってないということですね。フォームは見られたフォームじゃない。

城山 個性的ってことですね。

大平 ええ、個性的。だけど、案外スコアはまとまる。わたしは、そうなんです。まとまるんですよ。いつも良いというわけじゃありませんがね。

城山 あまり、先生に教わってしっかりやるというわけじゃないんです。

大平 そうじゃないんです。自己流なんです。自分でいろいろと工夫するわけです。

城山 流れるような華麗なフォームで打たれるとは思いませんけどね。それにしても、焼酎のようなゴルフというのはおもしろい表現ですねえ。じゃ、チヨコレートなんか握れば強いほうですね。

大平 強いほうです。

城山 あぶないですね、じゃ、握るといふことは。

大平 いやいや、いつでもおともします。

城山 あとは、ご趣味は何ですか。

大平 書、将棋はいたしませんし、麻雀もしないし、ええ 読書といつても、これも、まあ雑誌のほうでしてね、別に系統的なものじゃございません。そのとき、手あたりしだい読んでおるといふことです。

城山 本を読むと同時に社会の空気を吸収するというところもあるんですね、雑誌とおっしゃるのは。

大平 ええ。

城山 お芝居とか映画とか、そういうものにいらっしやる時間は、あんまり

大平 それは、あんまりないです。

城山 小唄とか長唄とか踊りとか、そういう日本的なものは

大平 それもダメなんです。

城山 じゃ、宴会に行っても、黙って

大平 ええ、よく誘われますけども、だいたい小唄とか長唄とかね。歌沢とかなんか誘われちゃあ、用心しないとね、あれは、いっぺん聞き始めたら、たいへん時間を食いますからね。愛好者として、聞いてもらわなきゃ意味ないんですからね。ところが、ついいっしょに飯食おうということになつて、連れていかれて、いつまでもそれを聞かされちゃかなわんですからね。(笑)もう、わたしは、ノーサンキューで、なるべくそういう誘惑には陥らんことにしているんです。

城山 お酒は強いんですか。

大平 酒はダメなんです、元から。しかし、宴会なんかでワーワーというのは好きですよ。

### 如水会々報とクラス会

城山 ところで、如水会々報は、どこをお読みになつていますか。

大平 まず、定例晚餐会の講師のお話ですね。あれは、サマリーですけれども、あれを読ましてもらつております。それから、随想欄でたまにおもしろいのがありますね。それからあとは、会員の消



息と各支部からの便りを、ちよつと拾い読みしてみたり　それから亡くなられたかたや、そのご家族のことを書いたりしたのがございますね。ああいったものをときどき見てます。

城山　ご卒業は何年でしたか。

大平　昭和十一年です。

城山　同窓会、同期会は？

大平　同期会は、わたしのほうは五つありましてね、合同でやるのもありますが、「八鷄会」というものだけの場合もあります。それから昭和九年、十年、十一年でいっしょにやったり、十一年、十二年、十三年でいっしょにやったりする会もあつたりして、ときどき呼ばれます。

城山　ハツケイ会というのは何ですか。

大平　「八鷄会」は高等商業から来た人。昭和八年の入学ですから、十二支ではね、八年の鷄なんですよ。八年に入った鷄どもちゅうんじやないですかね。鷓じゃなくて鷄、(笑)「八鷄会」じゃないんだ。たまに呼ばれて、こちら(如水会館)です、き、き、きをやりたりなんかしてますよ。

城山　いま、同期ぐらいたと、会社にいと、普通はどういうところでしょう。

大平　一流会社の社長になったのが、日本鉱業の鹿野君なんかそうですね。それから大会社では、そうね、こんど三菱銀行の副頭取になった露木なんかそうですわね。ああいうクラスですね。だから、専務級、常務級は相当いますけどね。トップマネージャーになったというのは、まだ、そうたくさんはありませんね。これからじゃないですか。ほちほち出てくるかもしれない。

城山　そういう同期生をこらんになって、あつちに行つてたらどうなつたらうとか、あの道へ行けばよかつたとお考えになることがありますか。

大平 ぼくは、銀行や会社に行つたらだめじゃないでしょうか。

城山 どうして。

大平 そんなに気がきいてませんからね。政界では非常に順調に来すぎたんで。そんなに能力がないのに、たまたまいろんな機会に恵まれ、人に恵まれたので、過当な処遇を受けたような気がするんです、わたしは。当然より、過ぎたね、過当な。

城山 一つはけんかつ早いと実業界はつとまらないから、官界へ とうと語弊があるかもしませんが、よく、自分は役所ならいいけど、会社に行ったら、とてもつとまらないということがあつて、役所に行く人がありましたね、昔は。

大平 わたくしは、この前もあなたと対談で申し上げたように、大蔵次官の津島（寿一）さんが大蔵省に來いというので、それじゃ行きましようというんで行つただけでして、非常に苦悶して最後に官界を選択したというわけじゃないんです。そういう機縁があつたから、それじゃ厄介になるか、ということでした。

城山 それは結果的によかつたわけですね。

大平 ええ、そうですね。わたしとしては悔いはないんです。

### 上田辰之助ゼミの思い出

城山 ゼミナールはどこを。

大平 ゼミナールは上田辰之助先生。

城山 ああ、そういえばちょっと似てますね、風格（笑）。茫洋として。

大平 いやいや、茫洋としてといったって、あの先生は神経細かい方ですよ。わたし わたくしもそんなに茫洋としていませんけどもね。あんまり繊細じゃ（笑）繊細じゃないけれども、上田先生は非常に繊細な人でしたよ。

城山 何をテーマにされたんですか。

大平 トーネイね、わたしは先生といっしょにトーネイを読みましたよ。つまり資本主義社会はフアンクシヨナルなソサエティーに持つていかないとけない、というこつちやないですかね、あれ。上田先生はトーマス・アキナスの原典にさかのぼって勉強をされた人で、中世的な職分社会というのが、そういうものが先生の思想の根底にあったんですよ。それで、われわれにもそういうものを読まそうとされたんじゃないでしょうか。ところが、われわれがいかに英語力がないかということがね、先生のひと言でわかるんですよ。非常にその点が嚴格でしてね、英語というもの、ことばというものに対して。

城山 非常によくできた人ですね。

大平 ええ、非常にことばはだいにされます。言語社会学者じゃなかったですか、あの方は。言語から入った社会学。ですから、あの方は、英、独、仏はもとよりだけれども、スペイン語から、イタリア語から、中国語から読みましたからね。ことばの天才でしたね。それで、ことばに対して非常に嚴格でした。衿を正してあたらなないとひどく怒られちゃって。英語の読み方、それから書き方ね、つまり、和文英訳というものをやる場合に、先生の場合は、いっぺん和文をくだいてしまつんですよ。そこに書いてある思想を、そこに一つの形式をもって、一つの日本語がありますわね。いきなりそ

れにぶつかって、それを英語にしようとしなんでしょうよ。それをいつべんいろいろにくだいてしまつて、裏からも、表からも、横からもいろいろ見ましてね。それで、この和文は何をいつてるんだとか、何をいおうとしておるんだとか、いろいろなことをまず消化してね、それから英文を考えるといいわけですよ。いいかげんなことやったら、とてもだめなんです。わたしはそういう意味で非常に修業になったですよ。ことばをだいにする。

城山 ことばというのは、いちばんの始まりですからね。

### 杉村広蔵先生の影響

城山 ところで、当時、一橋には珍しいというか、珍しいという和一橋には悪いけれども、一時期、非常に幅の広い学者というか、つまりプラクティカルじゃない、非常に原理的な、原論的なことを究める、左右田先生とか、三浦先生とかがおられたわけですね。

大平 ちょうどぼくが卒業するとき、学長は三浦（新七）博士でした。けれど、あの文明史は、わたしは実はあまり聞いたことなかったんですよ。偉い人だとは聞いておったけれども、それで学長さんではあられたけれども、あまり直接講筈に侍るといふことはなかった。教えの庭につくことはなかったんですが、あの人のお弟子さんというが、左右田（喜一郎）さん。ぼくらのときは左右田さんはすでに亡くなれておりましたから。

城山 福田さんはいかがでした。

大平 福田さんも亡くなれておまして、福田さんのお弟子さんにあたる中山伊知郎先生が新進

の助教教授でね。ちょうど『純粹経済学』を世に問われたところで、講義を聞きました。それから、左右田さんのお弟子になつてゐる杉村広蔵　この人の講義には行つたんです。しかし、わたしは科目としてとらなかつたですよ。むずかしくてわからないんです、先生の経済哲学は。それで、それを選択して試験を受けるといふ気持ちにはなりませんでした。ただしかし、わたしは好きでね、わからんながら杉村助教の講義にはたびたび行つたですよ。しかし、杉村先生の教えをほんとうに受けたのは、卒業してからですね。

城山　そうですね。どつていふ形で。

大平　卒業したあとで、岩波から『経済倫理の構造』というのが出たんです。あれが先生の博士論文。それよりちよつと前にやはり岩波から『経済哲学の基本問題』が出ていました。つまり、経済哲学の基本的な著述が相次いで出たわけですね。わたくしは、逆に、経済倫理から入つて、経済哲学の本を涉獵したんです。その間に先生は亡くなられたんですよ。だからばくは、非常な英才を日本は失つたと思ひますよ。非常にすばらしい学者だつたと思うな、あの人は。それはもう何回もあの人の本を丹念に読みましてね。それで、わたしの思想というものが仮にあるとすれば、それをつくるものの考え方の素材になつておりますね、杉村先生の思想は。

城山　いまの若手の経済学者の多くがそうですが、非常にオペレーショナルな、プラクティカルなものばかりが発達して、それがまた實際に役に立つかというところ、ほとんど役に立たなくなつてゐるんですね。そういうのを見ると、経済哲学というのは、一時、時代遅れみたいな感じがあつたけれども、いまになつてみると、結局そういうものが残るみたいですね、感じとして。いまの経済学者の多くは、ほんとうに経済学のパンとしたシステムとかもの考え方があつて経済学者なのじゃなくて、非常に

重宝に経済問題について発言するから、経済学者なんですね。そういう意味じゃ、原理的なのとか、そういうものの考え方というのはだいいしなんでしょね。でも、直接には、それは会社に入っても役に立たないし、もちろん政治でも役に立たないけれども、そういうものがないとだめですね。じゃ、相当勉強なさったんですか、学生時代。

大平 学生時代はよくわからなくて、卒業してひもといてみて多少は匂いをかぐことができたという感じがするんです、杉村哲学は。とても入り口をウロウロしておった程度だと思えますけれども。

城山 確かにむずかしいですね、杉村さんの本というのは。ぼくもちょっと読みかけてやめた記憶があります。わりあい哲学は好きだったんですけど、杉村さんの本というのはむずかしいですね、エッセンスの上で書かれてるみたいで。

大平 そうそう。

城山 エッセンスのエッセンスみたいだから。

大平 やっぱりあの人は天才だったですね。確かに天才だ。群を抜いとったような気がするよ、ぼくは。しかし、ああいう人は意外に夭折するんでね。もっと生きとっていただければ、ずいぶん日本のためになった人だと思っただけね。

### 一橋の体質と如水会

城山 大蔵省に入られてから、いろいろ東大出のエリートたちと接触が多かったんでしょうけれども、東大出と一橋出の違いみたいなのですね。これは、ぼくは石原慎太郎氏なんかともよく話

をしたんですけれども、一橋出というのは「じんまりとまとまって、とにかく適応力はあるし、ある仕事を任せればやる。そういうところはあるけど、どうも野性がないんじゃないかと。東大の人たちは、仮に出来不出来はあるにしても、みんな、野性というか、馬力というか、そんなものがあるとそこはかなり違うんじゃないか」という話をしたことがあるんですけども、そういうことはお感じになりませんか。

大平 東大というのはね、一つの大きな社会ですね。一つの学校というよりは、一つの社会というよな、一つの教育社会、あるいは学問の社会という非常に大きなキャンパスなんでしょうね、あれ。やっぱり、一橋は単科大学で、経営、経済とか、商業とかいうよな、ある意味で昔の高等商業的、職人的、町人的、そういう小さい社会ですよ。

だから、育ちが違うんですね。だから、東大の人のほうが寛大ですよ。寛大というか、物事にあんまりこだわらない。つまり、母校に対する意識もね、比較的稀薄なんですよ。八畳の中であるのと、二十畳の中であるのと違うよなものでね。なんかこう、母校という意識が一橋の場合は非常に強烈です。これ、いい面もあるんですよ、確かに。ぼくなんかそれで非常に助かってるんですけどね。ぼくは東大出ておったのでは、今日ないですよ。つまり、一橋に助けられたわけです。いろんな意味で助けられた。それはなんとすれば、非常に強烈なスクール・ファミリーという中におけるわけですよ。東大の場合は、そんなこと、たいしてこだわらないということ、まず第一に感じますね。それから、付き合ってみて、そういう意味で「いぶん友だちができました。その人たちの人間性に接して、ますますそういう感を深くしますね。だから、いい悪いでなくて、そういう違いはあるんですね。しかし、そういう一橋的なものがあっていいんですよ。日本にはそういうものがあってもいい。東大的なもの

もなけりやらんし、やっぱり「花は紅」でいいんじゃないですか。妙に東大のまねせんでいいと思ふんだ、ぼくは。一橋は一橋でユニークな個性をできるだけのびと出していきやあいんじゃないんでしようか。それが日本の社会を多彩にしていくんでは。

城山 わたくしの場合も、振り返ってみると、ゼミナールは、わたくしは山田雄三先生についたんですけれども、一学年十五人で、ほんとうに真の底から学問とは何かということとを三年間みっちり教えられました。まあ、山田先生の経済学も、いまのはやりの経済学とは違って、個と全体との関係は何かというような、ある意味で哲学的な発想から来てるわけで、そういう意味で、わたしは経済から文学に転換する場合でも、やはり個と全体との関係は何かということも文学のテーマですから、非常に転換しやすかった。

また、わたくしもずいぶんゼミナールでは謀反を起こして、弟子のくせに山田先生に絶縁状を叩きつけて、飛び出したこともあるんですよ。それは、経済学に対して、過度の期待といますか、社会的改革的な非常に血の熱いものを期待していたところが、近代経済学ですから非常にクールですね。そういうものにたまらなくなつて、わたくしはこういう経済学についていけないからといって。しかし、そのときも、山田先生にじゅんじゅんと、あなたを無理に引き止めない、しかし、自分はこのように考え方を経済学について持っている、ということ。つまり、個と全体との関連を追い詰めていくんだという話を伺つて、「しかしあなたは自由だから、どうぞお行きなさい。それでもなおもつて一回やる気があるなら、また来なさい」といわれました。だから、わたくしはそういう意味では、生涯、山田先生に頭が上がらない。

そういうことは、やはり、一橋という、一つのサークル十五人という非常にきめの細かい、ほんと



うに一人一人の人間をじっくり見詰める場に置かれたから、ああいう非常にいい師にめぐり会えたわけです。しかも、生涯、頭の上がらない人と。そこから先を、そういうものを踏まえてどう生きるかというのは、それぞれ個人の課題だと思えますね。ですから、ただ一橋を出たということで、いまおっしゃいましたけれども、いろいろの意味で、村の中の平和みたいな形で、いろいろな形で応援されるということに甘えてはいけないということですね。

大平 甘えちゃいかんです。わたしは自分の生涯の貸借対照表とってみたら、何を一橋というコミユニティーに与えたか、何を受けたかというバランスをとってみたら、受けたほうばかりですね。与えたものはあまりないしね。やっぱり、あなたがいう、これまで相当甘えてたと思うんだ。で、まあ、これから多少なりともお返しをせな相すまんと思っています。(笑)

城山 まあ、「如水会」じゃないけど、「君子の交わりは水の如し」だから、あまり気にされないで。

### 尊敬する人物 吉田茂

城山 ところで、話を変えまして、学校時代は、そういう意味では上田先生とか杉村先生とか尊敬なさる方があったわけですが、もっと長い目で見て、たとえば歴史上の人物で非常に興味をお持ちになるとか、尊敬される人物はどんな人でしょう。

大平 歴史上の人物というと、そんなに、たいしてぼくは歴史は知らんから、(笑)まあ、日本の最近の状況の中で接触を持った人ということかというと、わたくしは、吉田茂さんにひかれるものがありますね。

城山 はあ、どういふ点。

大平 吉田さんという人は 一つはあの人の勇氣。

城山 それは新聞社のカメラマンに水をぶっかけるような勇氣。

大平 つまり、非常に個性の強い人で、相当傍若無人なところがありました。傍若無人だけど、しかし、あの勇氣はりっぱだと思ふ。ぼくらはどうしてもまねられない。なぜ勇氣が出るかというところ、彼が正しいからです。彼は、おれはこれが正しい行き方だと、こついつことに揺るぎない信念を持つてゐるからね。ああいう勇氣が出るんだらうと思ふんです。それから、彼は清潔だと思ふんです。精神的にも物質的にも非常に清潔な、それがあつたから勇氣が出たんだらう。そういう点で、ぼくは、あの人は一つの範とするに足る人物だと思ふ。

それからあの人は、それでいて小さいことに非常に神経を使つた人ですよ。たとえば、自分がいふべん恩義を受けた方、その子供さん、そのお孫さん、そういう方のことをたいへん心配してゐるんですね。その人の幸せを祈つてゐるわけですね。だから、そういう人から何か頼まれたとなれば、じつとしておれないんですね。池田（勇人）さんのところへは吉田さんの手紙が行き一杯ぐらゐありますけれども、池田未亡人は、その手紙をずっとだいに、家宝にしておられる。その手紙の大半はね、天下國家のことはもちろんありますよ、あるけれども、非常に小さいことで、この人からこついつ願ひがあつたが、これをしてきたら聞き届けてやってくれんかという きわめて些細なことでも、きちんとして巻紙に自分で書いてね。「池田首相閣下 吉田茂」とね、ちゃんと封書でやってくるんですね。人間關係を非常にいいかげんにしないんです。

それから、よく本を読んでおつたんですかね、話題はきわめて豊富だし、それから非常にリファイ

ンド・ユーモアが、もう話題の中にあふれてるんですね。あれは非常に勉強しておったと思いますね。そして、先生はなにかにこだわってないという。なにかにこだわると、たとえば権力とか、金力とかなんとかにこだわっておったのでは、あの涼しいユーモアは出ないと思う。そういうものをあの人は持つておったと思いますね。

城山 わたくしは『落日燃ゆ』の中では、広田弘毅が、同期生でありながら、自ら計らわない。吉田茂のほうは徹底的に自ら計らうと書きました。あの場合は、たとえば奉天総領事のポストの問題とかいろいろなことがあります。息子さんの吉田健一さんが書いておられるのを見ると、父は確かに出世を求めた、出世を求めたけれども、それは出世しなくちゃ仕事ができないという信念があったから求めたんだ、という意味のこと書いておられますね。そういう意味では、臆面もなしにポストを求めた。ベルサイユ講和条約のときでも、牧野伸顕のところに頼みに行つて、秘書になつてついでに行くわけですね。あの、ある意味での臆面のなさみたいなものですね、あれはあそこまで徹底すると、りっぱだという気がするんですけどね。

大平 ぼくもそう思いますよ。あなたのあの『落日燃ゆ』も読みまして、広田さんと吉田さん、どちらも非常にりっぱだと思いました。広田さんは広田さんなりに、ああいうのは得がたいパーソナリティーだと思いますが、吉田さんも、なにもいたずらに地位を求め、権勢を求めたとは思いませんね。なにかをやるためだということとで、そこをなにも恥じらうことなく、おれを次官にしるよといつて行く。ちよつとできない芸当だと思えますね、あの勇氣は。

城山 やっぱりあそこまで徹底するというのは、一つの人間的魅力ですね。ああいうのを書く、吉田さんの信奉者から、吉田さんの神話をこわしたみたいにいわれるんですけど、わたくしは、あれ

は吉田さんの人間復活だと思っんです。あれは人間的な魅力ですからね。変になまはんかにつかず離れずみたくないことするよりも。

大平 それから、吉田さんは非常に小事に利用されたと思っな。吉田さんがごういったとかあいつたとかいうことで、権威づけて、それでなにか事をなそうという場合に、吉田さんは利用された。吉田さんはあまりそういうこと考えていないんだ。ところが、そういうことに遭ったケースが二、三ありますね。大平はどう考えてるんだということ聞いて、ぜんぜん違っじゃないかと思っんです。そんなことにこだわってないということ確かめてね。だから、えてして歴史というものにはいろいろ、真実じゃないことが残るんですね。

城山 台湾をめぐる吉田書簡問題などというのもそうなんじゃないですか、中国問題で。

大平 あれは池田さんに頼まれて、吉田さんが、いっぺん、じゃ、台湾に涼みに行こうということになった。池田君も困ってるじゃろうに、行ってこう。というだけの話で、書簡の中に何を書いてあつたかは、ご本人はともかく書簡の中に何を書いたかとかなんとかいうことではないんです、あれ。いっぺん、おじいさん頼みますよ、といわれたら、それじゃ、いっぺん行っつて涼んでくるよ、といっつて行かれた。そのことがだいじなんで、携行した書簡は別に、ご本人、署名をどうされたかどうかはそんなことたいして気にしてないんじゃないの。

城山 それがあとでいろいろ利用されたとか。池田さんも魅力があるんですけど、吉田さんのほうがスケールが大きいですか。

大平 それはダンチに大きい。

城山 いつかおっしやっつていましたけれども、池田さんは非常に愚直なところがいい。しかし、ち

よっと細かすぎるみたいなことがあると。

大平 いや、愚直だからそうなんです。そこを大きく離れられないところ、突っ放すことができない、そういうものはやはり愚直だからだと思えますね。それはそれとして一つの生き方ではあったと思いますがね、豪傑ではなかった。吉田さんというのは豪傑的要素があつたな。

### 大蔵大臣というもの

城山 財政家ではいかがですか。いま大蔵大臣のお立場からこらんにあって、大蔵大臣では。

大平 歴代の大蔵大臣ねえ。

城山 だれをいちばん評価なさいます？

大平 ちようど、わたくしがね、大蔵大臣としては五十番目なんです。五十人おつたわけですね、日本の内閣制度ができてから。その中で『何々財政』という財政に固有名詞をつけて考えるところとは、わたくしはとらないんです。というのは、そのときの日本の状況の中で、どう予算を組み、どう金融政策をやるか、どういう為替政策をやるかということですからね。その状況がどうであれ、自分が出ていったらこうやるんだ、なんていうのはむちゃくちゃだと思う。状況に合ったことをやらなといけないものだと思うんです。で、それぞれの大蔵大臣がそれぞれの状況でそれぞれの判断をして、いいか悪いか、ともかくやってきたんじゃないでしょうか。だから一概にだれが偉いというのは、わたくしは財政政策という角度から評価するのはちよっとむりじゃないかと思えますがね。

しかし、人間としてどういう方が魅力があるかというなら、それは好みによっていろいろ出てくる

んだらうと思えますけどね。たたいえることは、大蔵大臣とか日本銀行総裁というのは、一種の日本の信用の基礎だということですね。日本の日本銀行券に象徴される信用を代表する人が、大蔵大臣とか日本銀行総裁なんです。したがって、非常な財政学者でなければならんとか、経済通でなければならんとか、国際通でなければならんとかいうものじゃないんです。あの人がやっておるんだから、まず大きな間違いはないのではないか、という信頼、そういうものがあれば大蔵大臣は務まるし、そういうものがなければ大蔵大臣というのは、もうぜんぜんアウトでしょう。なんぼりっぱな財政理論を持っておつても、国会答弁がうまいとか演説がうまいとかいっても、それはダメだと思えますよ。

城山 そうですね。そういう技術の問題とか表われ方の問題ではないということですね。

大平 だから、高橋是清さんが何回か大蔵大臣をやられて、あるいは総理大臣を終えてからまた大蔵大臣になられたりしたが、あの人が大蔵大臣ということになると、国民がまずひと安心したんじゃないだろうか。国民の各層が、まあ、このダルマさんがどつかと座ってくれたんだ、ひどいことはあるまいよ。と、なにかそういうものがあつたんじゃないでしょうかね。

城山 そのためにも、自ら総理になつたあとでも大蔵大臣になられましたね。

大平 そういうものじゃないでしょうか。だからそういう意味で、大蔵大臣とか日本銀行総裁なんていうのは、よほどしめてかからんといけないんじゃないでしょうかね。もつとも、政治の要職にある者は、みなそうすけどね。経済のいちばん基礎になる信用。その信用とのつながり。

城山 だから、状況が荒療治を必要とするときには荒療治をしなければならんし、はでな治療を必要とするときは、はでな治療をしなければならんけれども、きめ細かい治療を要するときにはきめ細かい治療をする。ただ、はでにやったから、あの人はなんとか財政というふうに出てくるのは、結果

論でしかないということですね。この前、非常にきめ細かく、地味に控え目に、何々しない、ということを買かなければならぬのだ、ということをおっしゃいましたね、現在は。つまり、抑さえること。そういう非常に地味なことをする、そういうことを要求している状況だということですね。

大平 ええ、そうです。

### 内閣と各省

城山 ところで、なにか、マスコミの一部が変なことを書き立てていましたね。大平さんがじっとしていられちゃうものだから、案外、財政のことをご存じないんじゃないかということが、ゴシップ風に書かれているのを、最近、見たことがあります。しかし、ぼくは、へたに器用に動き回ったりなんかしたら、むしろ危いんで、そういう意味じゃ、ドンと重い文鎮みたいに乗っかっておられることのほうがだいじじゃないかという気がしますね、外から見ていまして。

それから、外から見ていて、どうも、内閣というのがよくわからないんですが、省内の局長あたりが総理と直結しているいろいろなことをパンパン進めちゃうという空気は、ちょっとおかしいんじゃないでしょうか。いま、それがあつかないかは別としましてね。また、そういう人間のほうが、変なふうにな大物視されたりする空気があったりするんですね。なにか、そのへん、いまの状況はちょっと異常じゃないかと思うんですがねえ。

大平 わたくしは、内閣官房長官なんかやった経験から申しましてね、内閣は「無」でなければならぬと思うんです。無ですね、無というのが、いわば、西田（幾多郎）哲学でいうように、有を限定

するんですね。よくわからんけども、無でなければ有を限定できない。内閣が、各省と相対的な有の立場になると、相対理論的な立場になりますから、これ、アウトなんです。内閣は、無でなけりゃならん。無であつて初めて、有をコントロールできる。これは西田哲学の基本じゃないですかね。

で、わたしは、官房長官時代に、内閣は仕事を持つちゃならん。有司百僚があるわけですから、それに全力投球してもらおう。で、事が出てきたら、まずあなたが、これは全力投球してこの問題を処理していきなさい。国務大臣並びにその後における有司百僚におりおりお頼みなさい。そうするとみんなが一生懸命になるわけですと池田総理に言っていました。内閣がある立場をとつて、内閣の意見と各省の意見が対立するということになったら、これはえらいことだね。内閣のほうが強いんだから、世間はみんな内閣に行くわけです。そうすると、各省は寝てしまう。内閣で、みな偉い人が相談してやつておるんだから、われわれには相談がないんだから、それじゃわれわれ適当にネンネしとれ、ということになる、本当に各省は寝てしまう。内閣だけが、もういろんな仕事を抱えて八面六臂で、あれにも気を配らないかん、これにも気を配らないかんということになると、ぼくは政治はめっちゃめっちゃだと思つんです。だから、内閣はせんぜんクールでね、「無」であるべきだと思つ。各省が一生懸命になつてやつておるといふ状況をつくるんです。

その点、池田さんとは毎日それをやつておつたわけです。「総理、これ各省にやらせましよう。こつやらせようじゃありませんか」と言つ。そうしたら、池田さんは、「いや、きみ、そんなこと言つて、いまじつと見ておれん」。(笑)あの人は非常に経済政策に詳しいから、「あれ、ほつといたら、きみ、心配じゃないか。あれを呼べ」「総理、そんなこと言わんで、あれは全部大蔵省にお任せましよう。通産省にお任せましよう。それで、あなたはかしわ手打つて、天地神明に、今日一日、日本国が安



泰であるようにお願いしておられたら、総理大臣、それでいいんですよ。すると「なに、きみは経済もろくすっぱ知らないで、なまいきなことをいうな」。(笑)「ずいぶん怒られたもんですよ。しかしぼくはね、「総理、そんなに心配せんで、みんなにやらせましよう」ということで、ずいぶんやり合ったことがある。干渉した結果は、あんまりよくない。任せきった結果は、案外いいですよ。それだと思っただ。」

それで、いまの田中(角栄)総理も、若干、池田さんと似た性格があるんです。本人、非常に気をもんでいましてね。まあ、財政・経済も詳しいし、大蔵大臣も長い間やつておったし、通産大臣もやつておったし、財政・経済・産業ばかりでなく、いろんなものを、ようたくさん知ってます。手に負えんぐらい知ってますよ。だから(笑って)「各省の次官や局長相手に一人でやりたがる。ぼくはね、それは、あんまり賢明じゃないと思います。田中さんも、やっぱり一応の事情は聞いてしかるべきだと思っけれども、直接アクションはとっちゃいかんよと言っんです。「いろいろの事情は、きみ、聞きたいなら聞いたらよかるうけど、大蔵省のことは私に任せなければだめだ、各省のことは各省大臣に任せておいてくれなきや、仕事にならんよ」と、それは、よく、ぼくは念を押しています。だから、あんまり気にしないんですよ、ぼくは。」

城山 内閣はクールでなければならん、というのは、たいへんいいおことばですね。

大平 内閣ばかりでなく、上に立つ人はそういう覚悟があるんじゃないですかね。そういうような感じがしますね、トップマネージャーは。

城山 わたくし、ちょっと、いま、通産省を舞台に小説を書いているんですけれども、感じとしては、だんだん、内閣のほうに有になって通産省のほうは無になってくるみたいなんです。つまり、

官僚機構のほうはだんだん無になってます。

大平 それは良くないです。

城山 政党内閣がうんと長く続いているからというんで、だんだん官僚の側が押されてくるという感じになってますね。しかし、なんとかしなくちゃいけないですね。やっぱり官僚機構というか、百僚有司の力を殺すのと生かすのとははずいぶん違いますからね。それにそういつちや悪いけど、大臣がすべてオールマイティーで、非常に見識もある人ばかりとはいえなくて、ずいぶん粗製乱造の大臣もありますからね。

### 戦前の国立と先生たち

大平 ところで、わたしは、今年の春、エール大学が学位をくれましたね、名誉法学博士でしたけど、それをもらいに夫婦でニューヘボンへまいりました。ニューヘボンの持つてる感じは、全体が大学町なんです。町全体が大学という感じです。大学の校内を走っておる道路が一般の市道ですからね、大学の中に町があるともいえるし、町の中に大学があるともいえる。それから、六百五十万冊とっていましたけれども、たいへんな図書館ですね。すばらしい。すばらしい環境で、うらやましかったですね。日本の場合は、ああいうぜいたくなことはなかなかできない。大学町といえは、戦前の国立では、ぼくらは、いも掘りに行ったりしたことがあるな。まわりが全部、野っ原だった。

城山 そのいも畑が、いま、団地になってるんです。国立に大学が移ったところは、坪二円で先生がたが買ってくれ、買ってくれといわれていたんですがね。しかし、なかなか坪二円なんて出せるもの

じゃないといって、買わなかった人が多かったという話です。

大平 日本興業銀行なんかの運動場があそこにあったと思いますが、あれはあるんでしょうな。近藤荒樹さんが、あそこにテニスコートを持っていますね。

城山 先ほどゼミが上田先生というお話でしたが、米谷先生だったという説もあるのですがね。

大平 客員なんです。米谷隆三先生とわたしは、わたしが学生時代、先生は洋行しておられて、三年のときに帰ってこられたんです。それからわたしは先生と親しくなりましてね。おまえは、わしのゼミナリストじゃないけれども、それと同様に取り扱うということになったわけです。だから、わたしは米谷ゼミの会合にはしょっちゅう行ってるんです。隆門会ちゅうのがありますね。

城山 それでゼミナールは米谷さんではないかということになったわけですか。

大平 本当は、そうじゃないんです。先生はほとんどおられなかったんです、あのころは。わたしの卒業ちよっと前に帰ってこられて、当時、田中誠二先生が会社法、手形法は本間喜一先生、米谷先生はまだ正規には商法の講座を持っておられなかったのです。したがって、ぼくらはあの先生の講義は聞かなかったんですが、まあ、ともかく、びしびし指導を受けました。こわい人でね、気概のある人でした。

城山 ほとんど図書館にこもりっぱなしで、勉強ばかりなさったということも、同級生の間で言われているようですが……。

大平 それは間違ったことで、とんでもございません。図書館なんか、あまり行ったことなかったです。(笑) 恥ずかしいけど、そんなに行ったことなかったです。

城山 しかしいま杉村先生の本はないでしょうね。経済倫理の本というのは見たことないですね。

大平 『経済倫理の構造』 岩波で、いい本です。実にすばらしい。わたしは（自宅が火事で焼けた時に）燃やしちゃいましたけど、非常に残念ながら。みんな持つてましたけど。わたし、何回も繰り返し繰り返し読みました。

城山 毛沢東からもらったものだけ。

大平 あれは、本じゃなくて字ですね。骨董屋が貸してくれというから、貸した間に助かつちゃったんです。

城山 それまで、ずっと杉村さんの本はあつたわけですか。

大平 ありました。左右田先生の本が最近また岩波から出ましたね。

城山 杉村先生の本は、かみ砕いていまの世の中にあてはまらないですかね。かみ砕くのはたいへんでしょうけれども、もう少し啓蒙書みたいになりませんか。

大平 啓蒙書になります。たとえば、カントをどう見るかとか、マキャベリをどう理解すべきか、ちゃんとありますよ。マキャベリなど、杉村先生は権謀術数家であるなんていう解釈はしておられませんが。すばらしいです。やっぱり国家論から、杉村先生は杉村先生なりの見方をされていた。われわれは、非常に頼りない、明日を知らない運命の中で生きている。しかし、われわれは平和を求め、愛を求め、善を求め、いろいろなことをするけれども、それは非常に頼りない、ぜんぜんあてにならない、非常にフォルトナーな世界の中にある。だから、善に達しようと思えば、全身全霊を込めていろいろな手段、術策を組織しなくてはならない。それをネセシタというんですね。手段、必要をネセシタという。それで、ビルトゥスですか、徳に至る。だから、フォルトナーとネセシタとビルトゥスという関係にあつて、われわれは、何をし、何をしちやいかんかというわけです。マキャベリはピ

ルトウスに達するには、こういつことをしなくてはならんと言っているのだが、その手段だけをとらえて、世人は権謀術数などといったっているが、これは間違いだ、彼の哲学はもっと崇高なんだ　と、まあ、簡単にいうとそういうような考えかたですね、杉村先生のマキャベリ論は。

それから、カントについても、先生は小さい単行本を出しています。カントを先生なりに理解して、非常にやさしく解説しています。三省堂だったと思いますがね。それから、資本主義は何かとか、社会主義は何かとかという基本の問題も問われている。いまわれわれが問題にしているような問題は、先生の哲学には、ちゃんと書いてあるんです。

城山　もう一回あの『経済倫理の構造』が出るといいですね。

大平　あれはやっぱ岩波から出してもらいたいな。山田雄三先生に言いなさいよ。中央大学の武藤光朗君が弟子じゃなかったかな。ぼくらの同級では、長崎大学の柳田君かな、長崎高商の教授になつて行った柳田君が弟子ですね。あの当時、何人かいました。非常にゼミナリストンが少なくてね。わたしどものときで幾人おったかな。武藤君なんか、われわれよりちょっと後ですけどね。

城山　いま、経済哲学の講義はないのかな、一橋には。このお話がきっかけになって、経済哲学の講座ができれば、きょうのお話は実り多いということになりますね。